
勇ましき者

come猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇ましき者

【Nコード】

N0788X

【作者名】

come猫

【あらすじ】

目が覚めると、見知らぬおっさんたちに囲まれていた！ 仕方なく二度寝すると、次は美女が目の前に！ これは、ふざけた勇者のおかしな短編物語です。

『夢であってほしい現実』（前書き）

力不足が目立ちますが、良ければ見てください。と、感想もお願い
したいです。

『夢であつてほしい現実』

これは、ある世界の悪魔を討つべく、ある小さな国に召喚されてしまった勇者の物語である。

おれは低反発ベッドに低反発ウレタンの枕を抱え眠っていた。そして

目が覚めると、知らない人たちに囲まれていた。

「おお、勇者様が目覚めたぞ！」

二度寝決定！

「おお！？ また眠りにつかれたぞ……」

目が覚めると、綺麗な人が目の前に。

コレだよ、これこれ。夢ってのは、むさくるしい貧相なジジやおっさんに囲まれているようなものじゃなくて、本人が満足しないとね。

「お起きになりましたか？」

「ええ、あなたは？」

そついいながら起き上がり、ベッドに腰掛けていた綺麗なお姉様の左手を握る。

「あ、あの、この国の王女を努めさせて頂いております。シーラル・ミソラ・クートと申します」

「王女、か……。いいですね」

小さく呟き、右手を肩に掛ける。吐息がかかりそうなほど近づく。

「あの、あの！ ゆ、勇者さまのおにゃ！ …… お名前はなんと言うのでしょうか……」

か、噛んだ……だと！？ 可愛い。普通に可愛い。

「んで、おれは勇者、か……。森羅です。シンラ」

「シンラ、さまですか……。！ いいお名前ですねっ！」

そう言って両手を口元に上げる。自然に肩の手と握っていた手はずされた。

「シンラでいいよ。えー……っと、シーラル？」

「こりゃ！ 様をつけんか！」

いままで黙って震えながらこちらを睨みつけていた、いかにも裕福そうな、サンタクロースみたいなおじさんが急に大声を出した。うるせ。

「は？ お前誰だよ？」

「あなた、シンラに失礼ですわよ？ あ、シンラ？ 私のことはミソラで結構ですよ」

怒った顔をしたかと思ったら、急に笑顔になる。ギャップというやつか……！

おれの夢にしてはよくやるな。

「ありがと、ミソラ。そこのおっさんも引き立て役ご苦労……。つて待てミソラ」

「はい、なんでしよう？」

「さつき、『あなた』っていった……。？」

「ええ、私の夫ですから」

「このおっさんが？」

「おい、貴様！ しつれ「ええ、一応王様ですよ」にこやかに答える。

「おい、王」

「な、なんだ急に」

おれはえらく冷めた目で

「死ね……。今すぐ！」

「コイツを牢獄へぶち込めえー！」

掛け声と共に、どこからともなく武装したおっさんたちが。

「あ？ 勇者にそんなこととして良いと思ってるの？ なあ、兵士の方々！ 今この世界に必要なのは、救世主の勇者様が、それとも、老いばれた傲慢ジジイか。判断しろ！」

「わーい、シンラかつこいいー」

王女がおれの味方についたことで、形勢逆転。

王様は、自分が呼んだ兵に連れられ牢獄行き。

「ふ、おれに逆らった罰よ……！」

てか、この夢長いなー。

「なあ、ミソラ。俺の頬を叩いてくれないか？」

「？ こう、ですか？」

セリフには似つかわしくない素敵なビンタをいただいた。

「いってえ……！ しかも、目覚めない、となると」

「だ、大丈夫でございますか……？」

目をうるうるさせながらおれの顔を覗き込んでくるので、思わず
チュ。

「んっ……シ、シンラ、様？」

「……あー、ごめん。つい」

「ま、まあ、いいです……。私も頬を叩いてしまいましたしっ」

ニコツ、と笑顔を向けてくれた。優しいし可愛い。

「と、聞きたいことがあるんだっ」

「はい、お答えできることなら何でも」

「おれがどうやってここに来たか、わかる？」

「ええ、この国の魔導師たちを集めまして、召喚、させていただいた
たのでございます」

「はあ」

「ですから、シンラはこの世界の人間ではないですし、夢、でもござ
いません」

「やっぱり、ですか……」

「そして、今この世界を支配しようと企てている悪魔『トビ小僧』を倒していただきたいのです」

「ああ、やっぱそういう展開……って、『トビ小僧』?」

「はい、私たちはそう呼んでいます……。隣国では魔王と言われるものですね」

「あ、そうですか」

「では、旅立ちの道具を王様……はいないので、代わりに私が授けます」

「はいはい、ありがとうございます」

てか、帰れるのかな。断りはしないけどさ。王女可愛いし。

「勇者証明書と、20ギル、『どのナイフ』です」

「……スルーで」

ツッコミどころが多すぎるぜ！

「では、まずはここから南にある『地獄の村』を目指すといいでしょう。旅のご無事をお祈りしております。詳しい事は、そちらにいる大臣より聞いてください」

「へーい。じゃ、行くか。ミソラも行くぞ」

「……へ?」

仲間一人目、王女ミソラ。

『可愛い子には客引きをさせよ』

く地獄村く

「ここが地獄村か……。名前の割には普通だな」

木作りの門をくぐり、村の中を見渡す。

「ええ、ですが、良い物がよく集まる場所だと聞きます。旅立ちにはうってつけの村ですね」

テンプレだな。

「この村は店の数が多いな……。ミソラ、まずは武器屋を回ってみよう。安くて良い物があるかもしれないし」

「わかりました」

屋台のように並ぶ店通りにおれ達は向かった。

「やっぱり20ギルじゃ買える武器はないな……。ミソラ、お金持っていないの？」

「ええ、王女といえどあまり裕福な国ではないものですから……。ごめんなさい、シンラ……」

まあ、確かにあんな王が自治する国だ。政治を巧くできるとも思えなかったし……。

「いいよ、気にしないで。ミソラのせいじゃないし」

「すみません……」

泣きそうな上目遣い。……襲っていいんでしょうか。

理性が飛びそうになった瞬間、後ろから声をかけられた。

「あの、お二人さん！ 旅人でございますか？」

小さな女の子。略して少女。がこちらを見上げていた。

「いえ、私は王「うん、そうだよお嬢ちゃん」

ミソラを遮り、特別な子供用スマイル。

「で、ではうちの店に来ませんか……？ 良いものそろってます！」

満面の笑顔は警戒を解き、営業モードに入っただろうか。その姿は可愛く、つい

「ああ、連れて行ってもらおうかな」

お金もないのにね。

「はいっ！ こっちです！」

「あらあら、走ると危ないわよ」

ミソラは手をひかれ、一緒に走っていった。その後ろを

「お金、どうにかしないとなあ……。ていうか、道中魔物も襲ってこないし、どうやって金を稼ぐんだよ……」

勇者がぶつぶつ言いながら、トボトボとついていった。

『人外は外道』

「いらつしゃい、兄ちゃん！ 安くしてるよ……。チツ、また逃げられたか……」

「あの店がうちのお店です！ さ、さ、見ていつてください！」
そういいながら駆け足で、ミソラの手を引き急かす。

「はいはい、あわてちゃだめよー」

おれは、少し警戒していた。こんな子供が客引きをするくらいだ。あまり儲かっている店とは思わなかったが、さすがに路地裏は怪しすぎる。

「お嬢ちゃん、そついや名前はなんて言うんだい？」

「ん？ さあ？ それよりお兄さん、いらつしゃいませ」

彼女はニコツと笑った。が、名前がないのはあまりにありえないのではないのだろうか。

「お、客か？」

「うん、父ちゃん！」

店の奥から、店主らしき獣耳のおっさんが出てきた。

この世界、やっぱり人間以外の生き物がいるのか……。ま、魔王がいるならいてもおかしくないが。

テンプレ、テンプレ。

「おし、お前は奥に行ってる……オラツ！ さて、と……いらつしゃい兄ちゃん！ うちなんでも揃ってますぜえ！」

「シンラ、これ何かな？ コレコレッ！ かつこいいよ！」

貧しい国の王女が見つけたのは発光する、いかにも勇者の剣らしき長剣でした。

「たぶん、『王者の剣』とかじゃないかな……」

まあ、苦笑いするしかないよね。

「お、兄ちゃんよく知ってるねえ？ そうだ、その通りだよ。それを装備してるとある程度の魔物は寄り付かないぜ！」

「ま、それ相応の値段がついてんだろ？」

「兄ちゃんの手持ちによつては、変わるかもしれねえなあ」

「20ギル」

「……は？」

キョトンとしている。まあ、当然だな。

「20ギルしかない」

「……おいお前、それに触るなゴラァ！　ぶち殺されてーのかあ！
？」

「きゃっ！？」

店主の態度は一変した。そして、ミソラを突き飛ばした瞬間、おれの何かが切れた。

「……行こうか、ミソラ。大丈夫？」

冷め切った笑顔。殺意をいっさい押し殺す。

「は、はい……だいじょぶです……グスンッ」

その目に溜まっている液体を見るだけで、殺意は4倍くらいに膨れ上がった。

「……おじゃましました」

「二度とくんなっ！　貧乏人がっ！」

おれたちは、暗い路地裏から、光のある大通りへと歩いていった。

『勇者だって怒ります』(前書き)

こちら辺からグロ注意です。

『勇者だつて怒ります』

おれ達は、また、店の並ぶ大通りを歩いていた。

「あの人、いえ獣人でしたが、ひどいですね……」

ミソラが目をこすりながら呟く。

「ねえ、おじさん。20ギルあげるから、この子を少し見張つてくれないか？ おれが戻るまで看板娘にしてもいいよ」

おれは、小奇麗な店で客引きをしている体格のいいおじさんにミソラを頼んだ。

「おう、任せとき」

人の良さそうな強面のおじさんにミソラを預け、おれは闇に引き返す。

「あの、シンラ……！ 行っちゃった、な……。どうしよう……」

「嬢ちゃん、信じてやんな……。客引き頼むよ」

おじさんはミソラの肩を軽くたたく。

「は、はい……。わかりました」

（何事もなければ良いのですが……）

「おいっ！ てめえ、だれが貧乏人を引っ掛けて来いっていったんだ！？ ああんっ！？ 何とか言えゴラ！」

容赦なく、頭を抱えうずくまっている少女に、人外の者は蹴りを浴びせていた。

「ぐっ……めん、な……さい……ぐふっ！？」

「おら！ 泣く暇があんなら、とつとと客を連れて来いっ！ オラッ！」

「ゲホッ……！ ごめん、な、さい……。うええ……。！」

「なに床を汚してんだっ！ 汚えんだよ！ さっさと拭け！ この、くずがっ！」

「はい……。わかり、ゴホッ！ まし……。た、から。蹴らない、で……」

「しゃべってる暇があるなら……」

「すいませーん！」

「チッ！ 客か……。はい、今行きますんで、少々お待ちを。」
おらっ、拭いとけよ！」

「はい……」

「ただいま行きま〜す！ っと、うおっ！？」

「いや、来なくていいよ」

「お、お前、さっきの貧乏人じゃねえか。なんだあ？ 死にてーのかコラ！？」

「お前さあ、今、その子のこと蹴ってたよな？ いつもそうなのか？」

「ああ！？ 話しかえてんじゃねーよ！ 死にてーのか、って聞いてんだ！」

胸倉を捕まれた。その腕を、優しく、ひねり折る。

ゴキッ。メリ、メリ……。！ ブチッ。

そして、捻じり切る。

「ぎゃああああ！？」

「いつも、してるのかって聞いてんだけど。お前に聞いてもしょうがねーかな」

「い、痛いっ……。！ 助けて、助けてくれっ……。！」

「なあ、お嬢ちゃん。大丈夫か？」

「は、はい……。うちは大丈夫です、けど」

「よかった。それじゃ、さっきの質問、答えてもらえないかな？」

「クソガキィ！ 余計なこと言っんじゃねーぞ！ 父親が殺されてもいいのか！？」

「お前は黙れ」

『どのナイフ』を立ち上がっている店主の右膝に刺す。

「ぐああ……!？」

「さ、教えて？」

「い、いつもは、されてません……」

「……そっか。お父さんのこと、好き？」

「……はい！」

「んじゃ、お嬢ちゃんに免じて、ちょっと苦しませるだけで、すぐ殺すね」

「……え？」

おれは、しゃがみこんでいる店主の耳元で、囁く。

「謝ったら、殺さん。だが、悲鳴をあげれば殺す」

「ぐう、はっ！ はあ、はあはあ……。す、すいませんでした」

「……お前、何が悪いかわかってる？」

「え？ そいつを蹴ったことじゃ……」

「あ!？ ミソラを突き飛ばしたことに決まってんじゃねーかあつ
!ー! クソがつー!」

おれは殺意に身を任せました。

この世界に来ておれは、筋力が全体的に上がっていたようです。

勇者仕様ですね。

素手で岩を砕くなんて朝飯前、100メートルも5秒で走れます。

魔法は、この世界には存在しないみたいです。代わりに召喚が盛んならしいです。

魔王も、悪い召喚師が世界を牛耳るために、どこからか召喚したものらしいです。

ちなみに、獣人や魔物も、誰かが召喚したもので、主が死んだり、契約を解いたりして野生化したものらしいです。

説明、終わり。

『時既に遅し』

意識が戻ったとき、おれはその結果、状況に少し驚いた。

「おれ、がしたんだよな……」

シンラの全身は赤黒く染まり、鉄の臭いが鼻を衝く。

足元には、肉片がサークル状に並べられていた。

皮膚。骨。眼球。肉。血液。薄黒い毛。

ちようど、一人分の材料。欠片。

「……風呂、入りたいな」

勇者は、店を後にした。

ハア、ハア……。大変だ……。お父さんが、殺され、ちやう……。
お姉ちゃん、どこかな……。怖いお兄ちゃん、優しくなってくれる、かな……。

どう、しよう……。お母さん……！

泣きながら辺りを見回す馴染みのある姿に、ミソラはすぐ気づいた。

「あらあら、どうしたのかしら？」

「お、お姉ちゃん……！ お父ちゃんが、お兄ちゃんが……うわぁーん！」

「お父さん、はあの獣人の方よねえ……。もしかして、シンラ……？」

それによく見れば、この子もボロボロじゃない。いったい何が……。

「あのっ、あのっ……。た、助けてください……。お兄ちゃんが

「……怖くなっちゃって……」

「いやな予感が走る。けど、行かなきゃ、いけないよね！」

「うん、私に任せなさいっ！」

「……！ほんと？」

「うんっ！ それじゃ、急ぎましようか。あのお店、よね？」

「う、うんっ！」

ミソラは、女の子の手をとり、駆け出した。

「お嬢ちゃんっ！ なんかあったら俺にも相談するんだぞー！」

おじさんが声をかけてくれた。人の優しさに触れた瞬間。

「ありがとう、おじさんっ！ 行つてきまーす！」

「……おじさん、か。若い子はいいいね……。まったく」

おじさんはミソラの後姿を見送ると、また、店番に戻っていた。

このおじさん、名をノルンと言うのだが、後に英雄レベルの扱いをつけることになるのであった。

変態人

「お姉ちゃん早くっ!」

小さな手に引つ張られ、前のめりになりながら走っていく。

「うん、急ごう……」

嫌な予感はなくならなかった。心の半分以上を覆っている。

早く、行かないと……!

「ねえねえお姉さんたち。そんなに急いでどこに行くのさ?」

「きゃっ!」

突然、頭上から声をかけられた。

「だ、誰!?」

「誰って……、僕?」

そういつて目の前に降ってきたのは、小さなピエロを連想させる少年のような、青年のような道化師。

「今、急いでいるので、失礼」

横を通り抜けようとする。

「おっとおっと、失礼はだめだよ」

「なっ、と、通してください」

回りこまれてしまった。

「だめだめだめ。君は駄目」

「どうして、あなたにそんな事をきめられないといけないんですか
!」

「シンラ君の頼みだしたら?」

「……え?」

いま、シンラの名前が出た、のは聞き間違いじゃないよね?

「まあ、そんな事はないけど。君は通っちゃ駄目なんだよ」

「あなた、シンラのお知り合い?」

「ねえ、お姉ちゃん! 急ごうよ!」

急かされるが、どうしようもない。

「君は通っていい。行きなさい」

「私の質問に答えてもらえないかしら？」

「あー、嫌だ」

この方、私をバカにしているのかしら……、時間もないというのに。

「では、通してください！」

「どうぞ」

「えっ!？」

「でも、どうなっても、すべてはシンラさんの責任になってしまいます。そこらへんはご覚悟してくださいね」

「ど、どういう……」

「では、わたくし寝ますので。これにて失礼」

そういうと道化師は、私の背中側の道に歩いていく。

「なんだったの……?」

「お姉ちゃん!」

「あ! い、急ぎましょう。早く……行かないと」

暗い路地裏に入るのは怖いけど、シンラのためだもん! 四の五の言ってられないわ。

そして、進んでいく。未来の絶望の世界の。

『町を飛び出したい』

薄黒く汚れた手。鉄の臭い。肉片の散りばめられた黒い服。

シンラは、路地裏を抜け、町を囲む塀の目の前にいた。

「……ミソラに会わないうちに出ないとな」

塀は2メートルほどの高さしかないので、今のシンラは平然と飛び越せる。

そして、其れを実行しようとしたとき、後ろから素っ頓狂な声をかけられた。

「へーい！ 主人公っ」

男のような、女のような、耳に残る金声。

「……誰だ」

シンラが振り向くと、そこには、性別は見分けがつかない。カラフルな三角帽をすっぽりとかぶり、顔はメイクをしている。まるでサーカスにいる、ピエロのような。

「誰でしょう？」

そいつはにやけて近づいてくる。

「おい、近づくなっ。質問に答えろ」

「力ずくで答えさせてみてよっ」

と言うが早いか、目の前から消えた。

「っは!？」

身体能力が上がっている自分が見えないのだ。敵う筈がない、と悟った瞬間、意識は途切れていた。

「よしっ、と……。君は逃がさないよ」

ピエロが一人、笑っていた。

『魔王も考えてます』（前書き）

今回は本編とあんまり関係ないです。

『魔王も考えてます』

魔王は言った。

「主人公？ 僕のこと？」

勇者は言った。

「主人公？ 僕のこと」

どっちも主人公なのだろう。そこに自信が有るか無いかの違いだけで。

そして、この物語の主人公は――

勇者は死んでも、英雄として語られるだろう。

魔王が滅べば、忘れられぬ大災害として伝え続けられる。

どっちもどっち。

じゃあ、例えば、魔王が勇者を助けるお話だったら？

根底そのものが拒絶され、矛盾が生じるはずだ。

でも、人生なんて矛盾だらけである。

小説のように、全てが伏線として繋がるわけではない。忘れられる出来事もある。

それは、つまり、語られない部分である。

そこが、案外、重要だったりする。

これは、魔王のよがった思想録。

『その程度の事』

端的に説明すると、勇者として召喚された森羅^{しんら}は魔王とよばれる存在に殺された。

極端に見た現実には、世界が、魔王に支配される事もなく、ただただその存在に脅かされるだけで、続いた。

とある国の王女はショックのあまり寝込んだ。

とある町の商人は伝説を創った。

それでも、世界にとっては小さな出来事に過ぎない。

ただ、それだけのことなのだから。

——魔王城——

赤い円形絨毯をすっぽりと敷いた大型のホールの中心に小さな、木造のこじんまりとした椅子がひとつ。

そこに座るのは、派手な外装に包まれた道化師。

「死に、詩になる。僕は死に、それを隠そう。詩になんて、伝説になんて、語り継がれる必要なんてない。ただ人を脅かす存在であるう。だから、もう、いいでしょ？」

道化師は、空に問う。

そして——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0788x/>

勇ましき者

2011年10月24日21時04分発行